

■From Yoshi to [A]:

“Where Whites Draw the Line.”

最近、アメリカ大統領選挙にかかわる話題を採り上げることが多いな、と感じているでしょうね。これも新聞の見出しです。オバマ氏がヒラリー氏に勝った理由はなんだろうか。選挙中もさまざまな議論があったし、そして候補として確定したこれからも多くの論評がおこなわれるだろう。ある論者は、大多数の白人投票者がオバマ氏を”post-racial”と見なしているからだと言った。たしかに彼は”black”なのだが”too black”ではない、つまり許容範囲内だったということである。 「線を引き(分かつ)」のは政治の常套手段。意図的に「抵抗勢力」なるものを作り上げて、自らを「改革者」と祭り上げる、なんていうのはその一つ。いずれにしろ、現代を読み解く際のキーワードとして「分断」はきわめて重要だと考えている。為政者は、分断することで人々を治めようとする。

“Divide and conquer.”

卑近な事例。働く人々を正規と非正規に分ける。非正規労働者が低賃金で、しかも厳しい条件で働いているのだから、身分が安定している正規雇用者も「文句をいわずに・・・」といった具合。男性と女性、高齢者を「後期」とそれ以外に分ける、健常者と障害者、大卒者と高卒者、・・・、と挙げていけば、枚挙に暇がない。

岩波書店の「思考のフロンティア」シリーズの一冊に『思考をひらく』がある。その巻に付された副題が「分断される世界のなかで」である。人々が、世界が分断される。その分断する〈境界線〉を超えていく〈新たな構想力の可能性〉が論じられているわけです。

ゼミの時間。マクロ経済学の基礎概念に国内総生産、国民総生産がありますね。これらの基礎概念を復習したときに、「国民って誰?」「日本人って誰が、どのように決めるの?」という問いかけをしました。覚えているでしょうか。

現行法(国籍法)にもとづけば、父親と母親が結婚しているかどうかにかかわらず、生まれたときに親のいずれかが日本人であれば、日本国籍が得られる。婚外子の国籍をめぐる最高裁の判断が示されましたね。つまり、出生後に認知された子だけに両親の結婚を国籍取得の条件とした国籍法の規定が違憲である、と。不合理な「差別」が救われたわけです。

境界線を引きことで生まれる〈差別・区別〉をどのように克服していけるのかを問い続けねばならない。現実をネガティブにのみ観るのではなく、どこに〈明るさ=希望〉を見いだせるかという視点で社会を見続けねばならない、と思っています。

Discussion のきっかけになるように、と思いつきの文章を綴ってみました。議論するぞと構えると肩に力が入ってしまうので、感じたこと、派生して考えたことなどで「応えて」もらえるとう嬉しい。

■From [A] to [B]

「改革者」

“CHANGE”オバマ氏が選挙中、盛んに言っていた言葉だ。私は、彼が大統領候補者の予備選挙に勝った理由の一つとして、国民感情に訴えたことを挙げたい。

現在、アメリカはかつて世界の覇権を握っていた。第二次大戦では連合軍側を指導し、勝利に導いた。戦後は日本の復興に力を注ぎ、着実にアメリカの世界的地位を固めてきた。しかし、イラク戦争では証拠の核兵器が見つからず、苦しい立場に追い込まれた。京都議定書の調印も拒否し、温暖化対策には消極的である。さらに追い討ちをかけるように、サブプライムローン問題により、アメリカ経済は混乱している。いまや、アメリカの地位はかつての「憧れの対象」から「なりたくない国」へと逆転する可能性を孕んでいる。

さて、アメリカ社会に暗雲が立ち込めているかのように思える現在、アメリカ人はかつての「栄光」を取り戻したいと思っているのではないだろうか。

“CHANGE”それは「変えてやる」という一方的なメッセージではない。ともに「変えよう」という意味ではないだろうか。

“WE CAN BELIEVE IN”今の悪い状況は「変えられる」と自信を持っているように見える。一見、中身の無いメッセージだと思えるだろう。はたして何を“CHANGE”するのか。しかし、こうしたわかりやすいメッセージだからこそ、大多数に受け入れられたのではないだろうか。彼なら「何かやってくれる」と。

ここで、人種問題についても取り上げたい。オバマ氏が大統領候補として受け入れられた理由

として、アメリカ人（主に白人）の中に、少しずつ黒人を受け入れようとする感情があるからではないだろうか。現に、ハリウッド映画では黒人が活躍しているし、IT 業界では、中国系アメリカ人や韓国系アメリカ人などの多様な人種が成功を収めている。

こうしたことが追い風となり、選挙戦を有利に進めることができたのではないだろうか。

「言葉の力」

小泉首相が総理大臣を務めていた時期は、「三位一体の改革」「民営化」などが流行り言葉になった。いったい具体的に何をするのかはわかりづらかったが、「改革」「民営化」という言葉はどこか前向きな意味合いをもつ。彼は言葉を武器に、高い支持率と影響力をもった。その負の面は隠しつつ・・・。

今回の民主党の大統領候補者予備選挙がこうした結果を招くのではないかが懸念される。

■From [B] to [C]

[A]の文章を受けて、まずは境界線についての私の考えを述べる。

境界線を引くことは何も悪くない。男性や女性、若者や高齢者、健常者や障害者、その全てが違う存在に位置づけられる。その境界線を受けて区別（あるいは差別）されることも妥当である。違うものは違う。それを同一条件に考えようとする間に間違いがあるように思う。違うものは違うとした上で、受け入れていくことが大事なのではないだろうか。

区別や差別ではなく、相互の理解あつての境界線が必要なのではないだろうか。互いの違いを、違いを活かして補い合うような社会が望ましい。時には一方的な手助けであろうとも社会で支えあうことが大事なのである。それが不可能とも等しく困難な事もわかってはいるが、あるべき姿はそうだと思う。

正社員と非正社員の待遇の違いに関しても、雇用条件に違いがある以上、区別は妥当である。しかし、過度の差は認められるべきではない。キレイ事を言えば、同じ人である以上、保障される最低限の待遇保障はなされるべきである。その意味で正社員と非正社員の区別は必要だが、妥当な差ではないと言える。

次に「言葉の力」に関して思うこと。

常々感じることだが、言葉の力は非常に大きい。十分な理解すらできないような言葉に前向きな意味を感じることは多い。なぜ理解し切れていないような言葉の響きに期待を込めてしまうのか。それは考えてもわからないけど、かすかな期待でも現状を変えられるかも知れないという可能性に、大きな魅力は人は感じるのかもしれない。

言葉だけなら、口で言うだけなら簡単だが、いざ実行する事は非常に難しい。前向きな言葉が大きな影響力を持つがゆえに、期待は大きく、敵わなかったときの失望は大きいだろう。でも前向きな言葉に人が動かされていく、その影響力だけでもその言葉は大きな意味を果たしているのかもしれない。たとえ失望する結果になろうとも、錯覚だったとしても、思い込み前向きに考えを巡らせていけたら人は十分強くなれる気がする。

■From [C] to [D]

『境界線を引くことで生まれる〈差別・区別〉をどのように克服していけるのかを問い続けねばならない。現実をネガティブにのみ観るのではなく、どこに〈明るさ=希望〉を見いだせるかという視点で社会を見続けねばならない、と書いています』と先生は述べた。確かにその通りだと思う反面、今の日本をはじめ、世界において何かの境界線を引くということは、主に差別を意味し、ポジティブに考えられることなど無いように思える。

境界線を引くということと、言葉の力ということを考えてとき、なぜか私は『ワーキングプア』が頭に浮かんだ。もともと引かれているであろう正社員・非正社員という境界線、男女の境界線、年齢の境界線をまたがるようにして、年収約 200 万の境界線を引き、『ワーキングプア』という言葉を生み出し、労働者の希望を奪った。働いても境界線に届かず、苦しい生活を送っている人。年収 200 万以下でも、自分は貧しい生活をしていると思っていない人を、ワーキングプアという境界線で区切り、また差別し、まだまだ下がいるから、自分は大丈夫だと言い聞かせているように思える。

[B]が言うように、境界線を引き、それぞれに合った対応をしていく、またその現状を受け止めさせる、というのが前向きで一番良い考え方なのかな、と思う。しかし、今の日本は境界線を引いても、各々に合った対応は出来ていないというのが現状である。また、境界線に言葉をつけ、世間に浸透させることにより、競争心や、協調や、差別など、さまざまな人の感情を引き出して、

各々の対応が出来ていないことをうやむやにしているように思える。

物事をポジティブに考えるのはとても大事なことだが、今あるネガティブな部分を見つめるということも大事な、と改めて感じた。

■ From [D] to [E]

現代の社会において境界線を引くことの意義は、物事をより詳しく、個別に見ることができるということだと思ふ。たとえば「正社員と非正社員の賃金格差」という言葉があるが、この「正社員・非正社員」という境界を作るからこそ、正規・非正規間の賃金に格差があるという事実が浮き上がってくる。しかし、この境界は正規・非正規の〈差別・区別〉という風にとらえることもできる。境界線を引くことのパラドックスともいえるのではないだろうか。

『境界線を引くことで生まれる〈差別・区別〉をどのように克服していけるのかを問い続けねばならない。』

私たちがゼミで取り扱う事象の本質は境界線の克服をテーマにしているものが多いかもしれない。ワーキングプアの克服、定年退職の克服、男女の賃金格差の克服、正規・非正規の克服……。

[C]は「分断」にポジティブな面は見出せないと述べているが、ある意味分断は必要で便利なものだ（ポジティブともいえる？）と考えた。

たとえば、先のエッセイ“Fair Wages”でも話題となった「男女の賃金格差」について。統計的差別の理論（Phelps）（Stiglitz）に基づけば、ある意味効率的な制度だということもできる。統計的差別の理論とは、企業が経営の中に効率を求めるとき、企業は女性より男性を雇用するようになり、男性を重要なポストに配置するようになるというものである。

なぜそうなるのか。それには2つの理由がある。

第1、女性の勤続期間は男性よりも短い（これは統計的に明らかである）こと。*確かに長く働く女性もいるだろうが、それを見抜くのは難しく、かなりの手間とコストがかかることを踏まえておく。

第2、社員の技能形成には企業内での中長期のOJTを必要とすること。

OJTの結果、キャリアが形成され、企業はキャリアの形成によりOJTへ投資した分を回収することをしている。

企業にとって統計的に勤続年数の少ない女性社員を雇用し、キャリアに女性を配置することは大きなリスクとなり得る。経営の効率を考えれば、女性より男性を……ということになる。

この理論は社員を男性と女性という性別境界で分断し、統計を出したことで見出された理論である。つまり、分断することで企業が競争を勝ち抜く希望を見出したと言えるだろう。「分断」のポジティブな面の一つである。

ここまで書くと、「男女の賃金格差肯定論」のように思うかもしれませんが、そうではありません。今、時代はこの「男女の格差」を克服しようという所までできていると思う。人口減少社会を迎えるにあたって、男女の平等という制度こそが、効率的であり、競争力を高めることになり得る時代である。

分断し、現実（リアル）を可視化することが、希望を見出す一手段なのだ。

■ From [E] to [F]

これまでに議論されてきた内容をうけて、差別という問題は私たちが解決しなければならない問題のひとつであるということ改めて強く考えさせられた。

まず、[C]、[D]の意見から、〈差別・区別〉には確かにネガティブな面とポジティブな面が存在すると思った。それぞれの性質が認識された結果の、区別というものは、悪いことではない。しかし、区別を対立概念にかけて差別し、ものごとの理由にしようとするのはよくないと思う。あゆは【境界線を引くことのパラドックス】という表現をしているが、それは〈差別〉と〈区別〉を一緒くたに考えているからではないだろうか。私は、〈差別〉と〈区別〉は違うものだと考えている。その上で、そのよくない部分、差別は“CHANGE”していくべきだと思った。

と同時に、気がついたことだが、「ワーキングプア」、「正社員／非正社員」という言葉が頻繁に使われるようになったのはごく最近のこと。何か言葉になるときというのは、人がそれを認識したときである。すなわち、それらの言葉は最近になって認識を強めたことになる。だからそれらの問題は、今の私たちにとっての問題であるということ。つまり、解決できるのも、問題の張本人である私たちなのだ。また、私は〈■From [B] to [C]〉の部分で述べられていた、恭平の【違いを活かして……社会で支えあうことが大事なのである】という考えに対し、確かにそうだと思った。どんなに区別をされて、違うものと認識されたとしても、その区別された同じ

類のものだけで成り立つ社会などあり得ない。支え合って初めて社会が成り立ち、パワーを生み出し、そこに希望が見いだせるのではないだろうか。

要は、希望が見いだせる社会に私たちが“CHANGE”するしかないのでは、と考えた。ただ現状を受け入れて、そのまま傍観しているだけでは何も変わらない。これから社会に出て行く私たちは、社会に対して責任をもつことになる。そして、社会でおこる問題の張本人たちとなる。だからこそ、社会に対して起こせるアクションも大きくなる。結局現状を変えることができるのは、現状にぶちあたっている私たちなのだ。問題を政府に丸投げして、批判ばかりするのではなく、希望が持てる社会を取り戻すために、どうしたらいいのか、真剣に考え、行動を起こし、自らの手で変えていく。また、そうしようと努力することが“CHANGE”にとって大切なのだと、改めて考えさせられた。

■ From [F] to [G]

これまでの議論を受けて、私も「差別」というものは解決されていかなければいけない問題であると強く感じた。

「差別」と「区別」。「差別」という言葉を聞いて嫌な印象を持ってしまうのは私だけではないと思う。広辞苑で「差別」と「区別」というこの二つの言葉を引いてみると、次のように記されていた。
 ・「差別」・・・差をつけて取り扱うこと。わけへだて。正当な理由なく劣ったものとして不当に扱うこと。

・「区別」・・・違いによって分けること。また、その違い。
 「正当な理由なく劣ったものとして不当に扱うこと」という意味を持つ「差別」という言葉・・・日本だけに限らず、現在の世界にはこの「差別」という問題が至る所に溢れているように思える。境界線を引き、区別するということは資本主義社会の中では必要不可欠なことである。しかし、差別はどうだろうか。差別をすることのどこに必要性を感じられるのであろうか。

今日の格差社会と呼ばれる日本では、正規社員と非正規社員の雇用差別が問題となっている。恭平の文章の中で述べられている「正社員と～妥当な差ではないと言える。」という考えは、私も最もなことだと思う。区別をするということは必要なことであるが、その区別をすることで生まれる正社員と非正社員の「差」が、近年非常に広がってきているのではないだろうか。同じ内容の仕事をしていても一方は待遇が保障され、一方は、働いても働いても苦しい生活を強いられる現在の社会のあり方には、疑問を感じずにはいられない。[E]が述べたように、私たち自身が希望を見出せる社会へCHANGEさせること、つまり、社会に対して働きかけることが一番重要なことなのだと思う。少しずつでもいい。とにかく行動を起こし、一歩ずつ前へ進んでいくことが、今の社会を生きている私たちに最も必要とされていることなのだと思う。

今回この文章を書いていて、「そもそも私たち人間はなぜ差別というものをしてしまうのであろうか」と考えてしまった。全ての人がそれぞれ個々の人間が持っている「違い」を理解し、その「違い」というものを素直に受け入れることができたのならば、きっと差別の問題はなくなるものと、私は考える。しかし、そのように簡単にいかないことは分かりきっていることである。つい最近幕を閉じた北京オリンピック。肌の色も言語も文化も違う 200 数カ国の人たちが、同じルールに則って、共に汗を流し競い合う姿には、とても感動した。少なくともそのオリンピックという真剣勝負の場には、差別というものは無かったと信じたい。差別も偏見も無い社会があったらどんなにいいのだろうかと考えずにはいられなかった。

■ From [G] to [H]

「境界線・差別・区別」・・・これまでに出来た、何かを「分ける」という意味合いの言葉を改めて考えてみると、それぞれにポジティブな面やネガティブな面が存在し、それが良くも悪くも私たちに影響を及ぼしていると痛感した。

また、これらの言葉を考え始めたときに、私はジョン・レノンの“Imagine”を思い出した。そして、これらの言葉の概念が全てとっばらわれたこの歌の様な感じが、極端に言えば一番理想的なのではないかと感じた。しかし、現実的に考えると、「境界線・差別・区別」の持つネガティブな面を消し去ることはできないと私は思うが、これらは、私達の生活において必要なものであると思う。

ネガティブな面を消し去ることが出来ないと感じるのは、私たちにとって身近な問題として存在しているからである。

人種を考えると、黒人・黄色人種・白人と分けられた人種が存在している。そして、そもそもこれらの分け方や呼称はなぜ行われたのかを考えると、白人による黒人・黄色人種差別が起源である。それでも私たちは、人種を考える際には、この差別的な視点が元である分け方や呼称を、当然のものとして受け入れている。また、国境という境界線をめぐるとしても、北

方領土や竹島といった問題が私達の身近なところで発生している。

このように、ネガティブな面は私達の身近なところに多く存在し、様々な問題を引き起こしている。このようなネガティブな面を多く抱えているにも関わらず、私が必要と感じるのは、これらの言葉におけるポジティブな面が、私達の生活を大いに支えているからである。例えば、差別に関してのポジティブな面は、「差別化」である。企業において、製品や技術力において、他者との差別化を図ろうとしないと、製品は良くなっていかないし、技術力も向上していかない。つまり、差別のポジティブな面がないと、日本の技術力の低下や、日本経済の低下を招いてしまうのである。境界線や区別も同様である。人間関係のマナーにおいて必要不可欠であったり、物事をスムーズに進めていく上で必要不可欠であったりする。

このように、「境界線・差別・区別」のポジティブな面がないと、企業や私生活に影響を及ぼし、日本経済にも影響を与えかねないと思う。だからこそ、ポジティブな視点から見る「境界線・差別・区別」は必要不可欠であると考えます。

「境界線・差別・区別」には、それぞれのポジティブな面・ネガティブな面が存在する。私たちは、これらのネガティブな面としっかりと向き合うことで、男性や女性・若者や高齢者・健常者や障害者・生まれや眼の色・皮膚の色や国家部族といった違いで、理不尽に分け隔てられる行為を抑止し、地球上からなくしていかなければならない。その上で、ポジティブな面を伸ばし、私達の生活に役立つポジティブな意味を持つ言葉としていくことが、私たちに求められる「境界線・差別・区別」への関わり方であると思う。

■From [H] to [I]

まず、今回のディスカッションは様々な事柄は分断されており、それにより＜差別・区別＞が発生する、という現象から展開されている。そして、分断されることには意義がある一方問題もあると語られている。現時点で語られている通り私はその意義こそ分断する事のポジティブな面であるし、問題がネガティブな面であると認識している。意義については生野の意見に同意するので割愛し、その問題であるネガティブな面に焦点を当てたいと思う。

さて、その問題点であるが、他にも色々あるが一番ネガティブな面としては差別が生じることだと思う。[F]は「日本だけに限らず、現在の世界にはこの「差別」という問題が至る所に溢れているように思える。」「差別することのどこに必要性を感じられるのであろうか。」と述べているが、なぜ差別が生じるのかと考えると私は違いを恐れているからであると考えます。人というのわからないもの、理解できないものに対して恐怖するのであり、そのわからないものを一括りにしレッテルを貼ることで安心しようとするのだろう。つまり、なぜ差別が生じるのか？という問いに対する答えは差別する対象を知ろうとしないからである。「アメリカ大統領選挙においてオバマ氏はヒラリー氏に勝った理由はなんであろうか。」先生の言うとおりの許容範囲内だったとすると、私の解釈はこうだ。黒人差別は長い歴史を通じてアメリカに深く根付いてしまっているが、黒人も白人も実は大して変わらないとアメリカ人は理解してきたのだろう。もちろんオバマ氏自身の魅力と戦略が優れていたという前提あつての話であるが。

[G]は差別のポジティブな面として「差別化」を挙げている。私はこれを人間社会にも当てはまることだと考える。製品においても優れた違いをただ違うとしか認識できないとすると、そこには購買意欲を掻き立てられるどころか逆に意欲は低下してしまうことがある。デジタルオーディオプレイヤーなどがその傾向が顕著である。企業は製品を宣伝することができるが、人間社会においてはそう簡単にはいかないだろう。大切なのは相手を知ろうとする意識である。差別され続けた黒人達に他には無い優れた身体能力や音楽などの文化があるように、相手を知ることにより違いを尊敬できるようになることが差別を無くす方法であると思う。理想論ではあるが決して実現不可能なことではないと私は考える。

■From [I] to [J]

今回の議論を見て、ゼミ中に「差別」と「区別」について少し考えたことがあったと思うが、本当に境界線が難しいと感じたのが第一印象だ。確かに今回のディスカッションは廉の言う通り、様々な事柄は分断されており、それにより＜差別・区別＞が発生する、という現象から展開されている。そして、分断されることには意義がある一方問題もあると感じた。私も意義については[D]の意見に同意するとして、ネガティブな部分を考える時、なぜ差別や区別が存在するのだろうか、その歴史を考えてしまう。ふと思うのは人間の歴史は＜差別・区別＞の上に成り立っているということである。

世界に目を向ければ、古来エジプトでは奴隷がいたし、日本でも例えば、江戸時代には身分制社会があった(エタ・非人)。明治維新で、徳川時代の身分制が再編成され、新たに華族・士族・平民の別が定められる。この時代、福澤諭吉が西欧の平等思想などを日本へ導入し、「天の下の

平等」を訴え近代化をすすめるなどした。むしろ、人間同士だけではなく、現代は国同士でも＜差別・区別＞がある。安保理などで決議されるとき、参加できる国はたった15カ国で、中でも5カ国は永久的に世界での重要事項が決められる現状がある。

ネガティブに考えるとなぜ人はいつの時代も平等に扱われないのだろうかと思うが、上記以外の今までの歴史を振り返ってみると、平等でない方がうまく社会が回っているような気がする。きっと人間が誕生してから今まで全てにおいて平等で「人の上に立ちたい」という野心が無ければ世の中は成り立ってなく、世界ももっと小さいものになっていたであろう。国の権威を示すための大航海時代もなく、アメリカ大陸も見つけてないのではないかな。他のみんなとすこし違う意見だが、ある程度の＜差別・区別＞は世の中をうまく回している気がする。

■ From [J] to [K]

議論の中心テーマとして挙げられていた「区別・差別」。確かに、この2つの言葉は、まとめて考えられるものではない。そこで、私は、「差別」に焦点を当てて、議論に参加できればと思う。

先のテーマの例として、「正規社員・非正規社員」「障害者・健常者」「男性・女性」等が挙げられているが、果たして、これらは「差別」に値するのか疑問を感じるころである。自身の考えでは、上記に挙げたものは、単なる「区別」にしか値しないと考える。私が考える「差別」として、過去の「ブラック・ホワイト」のを挙げたい。「ホワイト」の街中では、「ブラック」の人権は認められず、隔離され、最悪の場合、生きることすら認められなかった例も少なくない。このような過去があった国では、この「差別」としっかり向き合い、ようやく「区別」に辿り着いた。その証に、アメリカ大統領の候補者に「オバマ（＝初の黒人大統領候補）」が選出されたのではないか。辞書には、「差別」とは、差をつけて取り扱うこと、分け隔て、正当な理由なく劣ったものとして不当に扱うこと、と記載されている。表向きはそうかもしれないが、実際は「人間」に限って言えば、人権すら認められない、生きていくことすら認められないこと、としても良いのではないかと思う。

先にも述べたように、「正規社員・非正規社員」や「健常者・障害者」は、「差別」だとは思っていない。「正規社員・非正規社員」に限って話を進めてみると、確かに、働き方が分けられることで、待遇が全く異なっているという事実があることは認める。しかし、雇われているという時点で、「人間」だと認められているのではないか。ましてや、彼ら/彼女らの「声・発言」を受け入れてくれる機関や取り上げてくれるメディアが存在しているのではないか。おそらく、「ブラック」だったら雇われることも、「発言」することも認められなかっただろう。

先生の言葉の最後の方に、「境界線を引くことで生まれる＜差別・区別＞をどのように克服していけるのかを問い続けねばならない。現実をネガティブにのみ観るのではなく、どこに＜明るさ＝希望＞を見いだせるかという視点で社会を見続けねばならない」と思っています。」という文章がある。上で述べてきたことを参考にしながら、自分なりの答えを述べていきたいと思う。

我々には、この世に誕生した時点で「人権」が認められている。もちろん、日本に限ったことではない。しかし、過去には、誰にも剥奪され得ない「人権」が認められなかったという事実がある。境界線を引いてしまったが故の結果だ。どうして、「区別」で収めることが出来なかったのか、未だに悔やまれる。だが、それは、あくまでも過去である。先の1つ目の問である「＜差別・区別＞をどのように克服していけるのか」については、「一人の人間」として認められていることを喜び変えることで、克服するべきである。また、「どこに＜明るさ＝希望＞を見出せるか」という問については、「人権」が認められているからこそ、自分の手で世の中（政治・経済）を変える機会がある、という点が自身の解である。

最後に1つ。いつもの“感情論”になってしまったこと、申し訳ないと思う。

■ From [K] to [L]

＜差別＞と＜区別＞。これまでの議論を受けて、私は今まで大きな間違いをしていることに気が付いた。それは、どちらにもポジティブな面とネガティブな面が存在しているということである。今まで私は、＜差別＞と＜区別＞という言葉を知ると、どうしてもネガティブな印象を受けてしまいがちであった。しかし、先生の「現実をネガティブにのみ観るのではなく、どこに＜明るさ＝希望＞を見いだせるかという視点で社会を見続けねばならない」という考えを受けて、私の考えは一転した。＜差別＞と＜区別＞にもポジティブな面は多々ある。シゲの言うように企業の差別化があることで経済は発展し続けているし、人種を区別したことによって人類は発展した。

社会に対しても同じことが言える。私は日本経済の先行きは暗く、自民党総裁選で誰が首相になっても変わらないと、何事にも受け身でネガティブな姿勢を取っていた。しかし、よでいや真理子ちゃんの言うように、「私たち自身が希望を見出せる社会へCHANGEさせること、つまり、社会に対して働きかけることが一番重要なこと」という意見を受けて、自分から働きかけることで希望を見出せる社会にすることができ、自分が動かない限りは何も変わらないのだと考えを改

めることができた。

また、[B]の言うように、境界線を引くことには何の問題もないと思う。＜差別＞という言葉を知ると小学校の道徳の時間にいじめについての授業を受けたことが思い出された。人は自分と違うものを差別してしまう。自分と相手を比べ、外見や行動が少しでも違えば差別し、いじめが起こるということを習った。このことは、現在の日本社会にも当てはまると思った。非正規と正規という違いがあるだけで労働内容は一緒でありながら、待遇や賃金に大きな差がある。境界線を引いて違いが出ることは当たり前のことである。しかし、その違いを受け止め方によって差をつけ過ぎることには反対である。お互いが納得できる境界線を決め、受け入れていくことが重要だと思う。

この文章を書いているうちに、小学校の教科書に載っていた金子みすずの有名な詩が思い浮かんだ。

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう、
地面（じべた）をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう、
たくさんのうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

この討論のテーマである「境界線を引くことで生まれる〈差別・区別〉をどのように克服していけるのか」という私なりの答えは、違いを認め合うという、とてもありきたりであるが、誰もが忘れかけている最も重要なことに行き着いた。

■ From [L] to [M]

差別を克服するために、差別する方法を考えてみる。

差別をするにはどのような段階を踏めばよいのか。

まず「区別」をする。二つ、あるいは三つ以上の対象を比較するのだ。すると大小や高低、上下、先後などの事実が分かる。この時点ではなんの問題もないが、その後、個人の経験で色づけられたフィルターを通すと、――優劣、善悪、貧富、貴賤、快不快、損得、浄不浄、勝敗、美醜――そのような性質を見出すだろう。さらにその対象をありったけの憎悪を持って忌み嫌おう。軽蔑することが大切だ。たちまち「差別」や「疎外」の完成である。

幾人かのメンバーから、相手を知ろうと努力し違いを認め合うことが重要だという意見が出ていたが、そこに含まれる肝の部分は、軽蔑とは真逆の「敬意」であると感じた。違いを憎悪で感じてれば差別になるが、逆に敬意をもって接すれば認めることができる。

イメージは具現化するというが、その影響力は非常に大きい。例えば、公衆トイレは汚いものだと思っていればその通りになるが、逆に清潔なものだというイメージがあれば状況は一転する。この例を用いて先の正社員、非正社員の問題を読み取ると、当事者でない者が非正社員に対してネガティブなイメージを持てば持つほど、非正社員を軽く見るようになり、労働条件が悪くても非正社員なのだから当然だという風潮になる。よって正社員との労働条件がより開き易い環境が整うのではないか。非正社員と正社員との差が妥当でない原因は、当事者でない者が「妥当でない状況」を「非正規なのだからその条件で当然だ」と思っていることにあると思う。

オバマ氏の言うそれとは多少異なるが、believe、というか、思い込みは強力だ。そのベクトルが善の方向に向かっているならば良いのだが。

歴史を振り返って、先進国が途上国からあらん限りの搾取ができたのも、大量虐殺や原爆を投下できたのも、その行為が当然だと思っていたからだろう。

差別や格差を助長しているのは、当事者でない者の、当然、然るべき、当たり前、等々の思い込みではないか。相手を低く見る軽蔑の心は目を曇らせる。残虐な行為をしても屁とも思わせないだけの力がある。

区別を差別にして、その差別から悲劇を生ませないためには、軽蔑とは逆の敬意を払うことが不可欠だ。

■From [M] to Yoshi

ここにきて、いきなり[L]に「差別する方法」について考えられてしまったので、どう纏めればいいのか迷う。

《境界線を引くことで生まれる〈差別・区別〉をどのように克服していけるのか?》

アンカーである僕の役目は、この問いに対して何らかの答えを与えることだと思う。そのために、今までの議論の内容を、三文に纏めてみる。①現実・真実をしっかりと観る、②異質、異端、異能・脳を受け入れる、③理想を語る。これら三つが重なり合ったところに、区別や差別を超える何かがあるのではないだろうか。つまり、「リアルを直視し、違うものを受け入れ、その上であるべき理想を語る」ことが、境界線を引くことで生まれる〈差別・区別〉を克服することにつながるのだ。きっと、それは実現可能性を問うという次元の問題ではなく、人類が永遠に考え続けるべき壮大なテーマなのである。

人が、国が、世界が分断される。「人間」を「人」にしてしまったのが、根本的な原因なのかもしれない。人と人との間にあった何かを、断ち切ること。そのことによって齎される影響は様々（良くもあり悪くもあり）なのだけれど、「分断」という言葉自体、どこか寂しい・虚しい・受動的な印象を受けてしまう。だからこそ、僕たちは、その断ち切られた何かを繋ぐ架け橋のようなものになるために、能動的に働きかけ続けなければいけないのかな。

名目上（見かけの上で）、二分（分断や区別）されても、そのどちらにも属さない人がいる。そういう人達が重要だと思う。そういう人達の声が何かを変える。学生の視点から、黒人と白人の差別はおかしい、正規と非正規の格差はおかしい、働きたい人が一生涯働ける社会にしよう…。分断・区別による様々な影響を直接的には受けない人々（僕たち）の声が、きっと大きな変革になるんだと思う。そう信じたい。

* * *